



口腔・歯科の病気

CASE
15

☑ よだれが多い

口内炎・歯肉炎



猫には人のような虫歯はほとんどありません。代わりに、歯周病が多いと言われています。歯茎が赤く腫れ、時に出血する歯肉炎や、頬の内側の粘膜がただれる口内炎がしばしば認められます。これらはウイルスに関連したものと、歯石や細菌感染によるもの、原因不明のものに分けられます。ウイルスに関連したものとしては猫カリシウイルスによる口腔内の潰瘍があるほか、猫免疫不全ウイルス感染症でも口内炎・歯肉炎がよく認められます。歯石が付着すると、細菌感染が進行し、歯肉に炎症を起こします。炎症を起こした歯肉はどんどん退縮し、歯の根元が見えるようになってきます。ひどくなると歯が抜けたり、歯の根元に膿が溜まったりします。膿は骨を壊して皮膚の下にまで入り込み、顔が腫れることもあります。症状としてはご飯を食べる際に口を痛がり、とくにドライフードを食べたがらない、ときに血液の混じったよだれが多い、などが挙げられます。抗生物質や消炎剤による治療が行われますが、ひどい場合には歯を抜く必要があります。



内分泌の病気



CASE
16

☑ 水をたくさん飲む、おしっこが多い

糖尿病

糖尿病は猫で比較的多い内分泌(ホルモン)の病気です。人の糖尿病と同じように肥満に伴って発症するものと、膵炎の後に発症するものの2つのタイプがあります。糖尿病ではインスリンと呼ばれるホルモンが重要です。インスリンは通常は膵臓で作られ、血液を介して全身に運ばれ、血液中の糖분을体の細胞(とくに脂肪や筋肉の細胞)に取り込む働きをしています。肥満になった猫では脂肪が増えるため、インスリンの働きが間に合わず、糖分量を取り込みきれなくなります。また、膵炎を発症した猫は、膵臓がインスリンを十分作れなくなるため、やはり糖分量を取り込めなくなります。結果として血糖値が上がると、余分な血液中の糖分量が尿の中に漏れてくるため、「糖尿病」と呼ばれます。症状としてはおしっこの量や回数が多くなり、その分たくさん水を飲むようになります。体重がどんどん減っていきます。ごくまれに神経に異常をきたし、ジャンプできなくなったりすることもあります。糖尿病の初期であれば、食事や体重の管理で治療することができ、まれにですが治癒することもあります。進行するとインスリンの注射が必要になってしまいます。

CASE
17

- ☑ 吐く
- ☑ 下痢
- ☑ 水をたくさん飲む、おしっこが多い
- ☑ 呼吸が荒い

甲状腺機能亢進症

首の部分、気管の横に甲状腺と呼ばれる器官があり、甲状腺ホルモンが分泌され体の代謝を上げ、活性化する作用を担っています。なんらかの原因でこの甲状腺ホルモンが過剰になることが甲状腺機能亢進症です。人のバセドウ病と少し違いはありますが、病気としては類似しています。原因として、日本では甲状腺の腫瘍が多いと言われており、そのため発症は高齢になってからのことがほとんどです。良性と悪性の腫瘍が混在していますが、腫瘍の転移よりもホルモン過剰が問題となります。症状としては活動性の増加、攻撃性の増加、過食、水をたくさん飲む、食べるのに痩せる、毛がパサパサになる、などがあります。吐き気や下痢が見られることもあります。また、猫は通常犬のように口を開けてあえぐことはほとんどありませんが、甲状腺機能亢進症の猫ではしばしばこの症状があります。一般に高齢猫は寝ている時間が増えますが、妙に活動的で動き回るようになった、おとなしかったのに威嚇したり攻撃してくるようになった、などから気づかれることも多いようです。治療としては薬でホルモンを抑えたり、手術で甲状腺を摘出したりします。